

企画展「美濃の地歌舞伎」を開催

平成11年9月15日(水・祝)～11月7日(日)

江戸時代の末期から庶民の最大の娯楽として、村芝居が定着しました。当時、気軽に楽しめる娯楽には村芝居の他、相撲大会などがありました。村芝居は、農作業の疲れを癒すため、収穫の祝い、祭りの余興、奉納のためなどとして上演されていました。当時、全国的に大変盛んであり、明治時代には、熱中しすぎて仕事が疎かになるという理由から、度々禁止されたほどです。

中でも、中山道沿いは特に盛んであると言われ、各地こぞって上演していました。戦後も青年団によって上演されたり、「買い芝居」を招いた記録が残されていますが、昭和30年頃からテレビの普及により廃れていきます。

地区の青年団などが主体となって演じられた村芝居は、狂言、農村歌舞伎、最近では地歌舞伎とも呼称されています。素朴で、その土地土地で独特の味わいが創出される。それが、地歌舞伎の魅力でもあります。



羽崎 日吉神社

美濃の地歌舞伎

美濃は、相模、播磨とならび、地歌舞伎が盛んな所で、日本三大地歌舞伎の地とも称されます。中山道沿いの各所で地歌舞伎が盛んに上演されていました。

江戸時代初期の地歌舞伎は、神社での奉納舞の一つとして発生しました。そのため、神社の拝殿と地歌舞伎の舞台を兼ねた「宮舞台」が登場しました。江戸～明治の頃には県内に270棟以上の宮舞台があったといえます。可児市内でも、八幡神社(羽崎、今、塩河)、剣宮神社(羽崎)、日吉神社(羽崎)、秋葉神社(二野)、猿投神社(室原)、白鬚神社(土田)、太元神社(瀬田)に、かつて舞台として使用された残痕や記録があります。



俎帯 (まないたおび)

黒天鷲絨地金繍鷹岩波文
(くろびろーどじきんしゅうたかいわなみもん)

俎帯とは、花魁(おいらん)が着物の前面に結んでいる帯をいいます。花魁を囲う旦那の権力・財力を象徴しているため、大変豪華に飾られています。

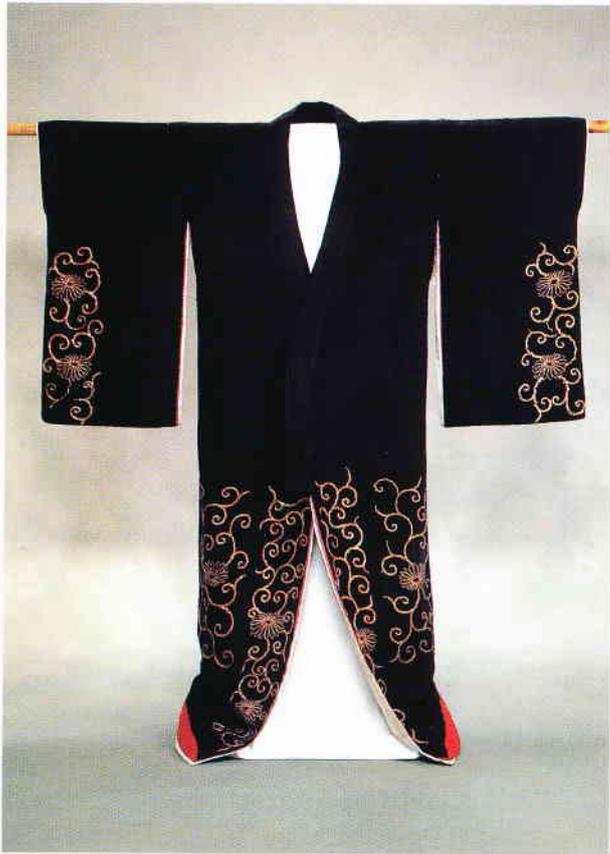
この俎帯は、金糸の厚みによって、羽を広げる鷹が生き生きと表現されています。

着付(男物) (きつけ・おとこもの)

黒絹地男物紋付
(くろきぬじおとこものもんつき)

外側に着る「打掛」に対し、内側に着る衣裳を「着付」といいます。着付の袴(ふき・裾の部分)には綿が入っており、役者が舞台上に立った時の立ち姿を流麗に見せるように工夫されています。





着付(女物) (きつけ・おんなもの)

黒木綿地金繍唐草菊花文
(くろもめんじきんしゅうからくさきつかもん)

男物の着付と同様に、袍に綿が入っています。着付は内側に着る衣裳であり、その上から帯を結ぶため、文様が外から見える裾や袖口のあたりにしか施されていません。

半腰(はんこし)

藍絹地紋付熨斗目
(あいぎぬじもんつきのしめ)

膝上丈の衣裳で、腰から半分しか長さがないためこの名称が付いています。袴の下に着ても動きやすくするため、丈が短く工夫されているのが特徴です。

また、武士が着る半腰には、胴の部分に使用される布地が異なる「胴抜」や、胴と袖下の布地が異なる「熨斗目」(写真)があります。





袴(かみしも)

白絹亀甲地丸龍鳳凰菊散文
(しろきぬぎっこうじまるりゅうほうおうきくちらしもん)

この衣裳は、大時代物で使用される袴です。
前述した半腰と組み合わせて着用します。

素袍(大紋)(すおう、だいもん)

紫木綿地大紋
(むらさきもめんじだいもん)

時代物で使用する素襖で、大きな紋が付けてあるため、役柄が衣裳から判別できるようになっています。大紋は、和紙に墨で描かれており、役柄によって貼り替えて使用しています。大紋を貼り替えることにより、別の衣裳であるかのように見せかけます。高価な衣裳であったため、少ない衣裳で幾つかの役柄に利用できるよう工夫がされています。



小忌衣(おみごろも)



襟部…菊立涌文(きくたてわくもん)

袖部…赤地錦鳳凰文(あかじにしきほうおうもん)

身ごろ部…段錦梅花丸文

(だんにしきばいかまるもん)

※子供の衣裳は、多種類の布地を合わせて作成されたものと思われます。

征夷大將軍の役が着用する小忌衣です。この様に、ある特定された役柄のための衣裳を「役衣裳」と呼びます。舞台の中では、衣裳の文様などを見るだけで、外題や役名を思い浮かべることができます。

華鬘結び(けまんむすび)は、金糸の太いものが固く巻かれており、衣裳が一層舞台栄えするように工夫されています。

四天、伊達下がり(よてん、だてさがり)

四天…紅色羅紗地松桜岩波文 バレン付き
(べにいろらしゃじしょうおういわなみもん)

伊達下がり…金色絹亀甲地龍牡丹文 バレン付き
(こんじききぬぎっこうりゅうぼたんもん)

四天とは、立ち廻りや武勇を象徴する役柄の人が着用する衣裳を指します。派手なものが多く、衿がなく、袖口が開いており、裾の脇が割れている特徴があります。

四天は裾の割れた形が美しく、脇に付けられた輪状の紐を帯に挟み、裾を吊り上げます。着付の下には伊達下がり(だてさがり)を纏い、見得をきった時には着付の下からちらりとのみぞかせます。見得をきる時や裾が割れてちらりと見える時のためにまで意匠を凝らすことにより、更に勇壮さを際立たせています。





四天は、武勇を象徴し、派手なものが多くあります。この衣裳は、背面を中心に前・後身ごろ共に金繍が施されており、金糸・銀糸を効果的に使い分け、風格のある松と桜を表現しています。

その上、裾にはバレン(金糸で編んだ飾り)が施されており、地歌舞伎の衣裳の中でも大変贅沢な衣裳の一つです。

役衣裳(やくいしょう)

「一の谷嫩軍記」弥陀六の役
(「いちのたにふたばぐんき」みだろくのやく)

歌舞伎の衣裳に見られる特徴の一つ、弥陀六の「役衣裳」です。

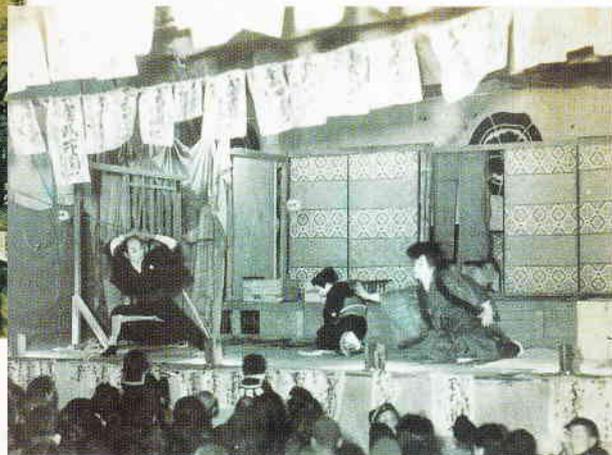
肩山に通された琴糸を引き抜くと早変わり(「ぶっ返り」)をします。ぶっ返りは、上衣の裏地と下衣を生かして、がらりと雰囲気を変える手法です。舞台では、隠していた身分や素性を明かす時に、この手法がよく使われます。



可児の地歌舞伎

可児市内にも各所に宮舞台の名残りがあり、往時、地歌舞伎が盛んであったことが偲ばれます。『今八幡神社祭礼記』には、既に享保11(1726)年に地歌舞伎が上演されたことが記録されています。

可児で演じられていた地歌舞伎も、地歌舞伎ならではの味わいがあったことでしょう。芝居好きが役を演じ、皆で舞台をつくる、大道具・小道具類は各個人の家から持ち寄って集まり、役者と観客の距離が近い舞台が出来上がります。村をあげてのお祭りとなったものでした。



謝辞

本展覧会を開催するにあたり、企画から展示に至るまでご指導、ご助言をいただきました、美濃歌舞伎博物館「相生座」の小栗幸江館長をはじめ、貴重な資料の出品をご快諾いただきました下記の皆様方に厚く御礼申し上げます。

武藤 辰夫 様

小沢 敷雄 様

奥村 成二 様

利用案内

休館日 月曜日・祝日の翌日
 開館時間 午前9時～午後4時30分
 入館料 大人310円、小人70円

可児郷土歴史館

可児市久々利1644-1
 電話 0574-64-0211

◎展示説明会

10月16日(土)午後1時30分より

講師／美濃歌舞伎博物館「相生座」 小栗幸江 館長